

□はじめに

内子町は面積の約8割を山林が占める典型的な中山間地域であり、内子・五十崎地区のわずかな平地、内山盆地に中心市街地が、山間部においては各所に集落が形成されてきた。このような地理的環境の内子町では、「道」がその発展に重要な役割を果たしてきた。主に大洲から松山へ向かう「大洲（松山）街道」、信仰の道である「金毘羅街道」・「遍路道」は、人々の往来により様々なものや情報をもたらしてきた。

信仰とともに現代へ受け継がれる「道」としては、特に四国八十八カ所霊場を巡る「四国遍路」における道、「遍路道」がある。現在も歩いて巡る「お遍路さん」が絶えず、古くからあるお堂や道標を頼りに回り、また地域では「お接待」の風習も続き、宿や食事などのお世話をしている。

また特徴的なのが「新四国八十八カ所」である。これは、かつて巡礼をしたいと願っても容易でなく、誰もが巡礼できるようにと主に明治期頃に各地に設けられた。地域内の88カ所に石仏などを納め、四国遍路の札所に見立てる。地域で石仏のお世話をしたり、地域によってはお大師詣でや一日巡礼、お接待などを行ったりしているところがある。

「道」や「信仰」による交流は、他地域からの情報や文化の伝播など「外」とのつながりを生むと同時に、特に現代では、各地域や集落における「内」のコミュニケーションツールの役割も担っている。

1 四国遍路

四国遍路とは、そもそもは弘法大師（空海：774～835年）の足跡をたどって巡拝することとされた。今につながる遍路が確立されたのは、

貞享4年(1687)に真念^{しんねん}が著した『四国辺路道指南』によってであるとされる。20余回の遍路を行った真念は、自ら道標や庵を建てた。

四国遍路の行程は、徳島県の1番札所霊山寺から、高知県、愛媛県を回り、香川県の88番札所大窪寺まで四国1周約1,400kmに及ぶ。札所間の距離が近い所がある一方、次の札所まで数10kmもあるといった所も少なくない。その八十八カ所の霊場を歩いて巡る道を遍路道という。遍路道は、本来、巡礼専用を設定されたものではなく、地域の人々の生活道や農道・林道などが利用されてきた。そのため時代とともにルートの変遷もあるが、その時々地域の社会の中で維持管理され守られており、札所を巡るお遍路を迷うことなく導いてきた道標や丁石が現在も各地に残っている。

巡礼者は大洲市から内子町へ入り、内子地区を通して大瀬地区方面へ東へ向かう。突合^{つきあわせ}（小田地区）からは臼杵^{うすき}（同）を経て下坂場峠へ出る道と、船戸^{ふなと}（同）を経て真弓峠やほうじが峠へ至る道があった。江戸期には巡礼者の多くが遍路日記を書いており、その中には、内子・五百木・大瀬・中田渡・臼杵村での宿泊記録が見られるものもある。



山中を行く四国遍路



寛政 9 年の道標(臼杵)



寛政 10 年の神徳橋の石標



黒内坊の大師堂

(1) 関連する建造物

① 遍路道道標

町内の遍路道では 18 基の道標が確認されている。元水戸森峠にあった元禄 2 年 (1689) 銘の道標は、県内で 2 番目に古いものである (現在は「商いとくらし博物館」に保管)。遍路道整備に貢献した朝倉上村 (現今治市) 武田徳右衛門の道標は、黒内坊、石浦、大瀬本町、大瀬石積、中田渡、臼杵倉谷、臼杵上畦々に 7 基も残り、寛政 9 年 (1797) の銘を刻むものもある。

② 神徳橋の石標

太森神社の参道入口にある石標。遍路道沿いに位置する。寛政 10 年 (1798) の銘があり、参道整備を記念して造られたもの。中川境、大川境からの距離も記されており、遍路道標としての役割も担っていたものと考えられる。

③ 遍路道沿いの主な大師堂等

内子町内には数多くの大師堂が存在する。これら大師堂のうち、遍路道沿いに設けられた大師堂は番外霊場として遍路巡礼の立ち寄り所となっているほか、地域の人々によるお

接待の場、時に雨露をしのぐ休憩所、宿泊所として利用されている。

また、日常は地域住民がお念仏やおこもり (お酒と肴をもって集まって数時間お堂にこもる。地域により方法は若干異なる。) で使ったり、周辺の清掃を行ったりするなど、地域の拠り所にもなっている。

※以下、①昭和 57 年 (1982)『小田町の文化財』、②平成 2 年 (1990)『内子の神社・仏閣』、③平成 14 年 (2002)『五十崎のお堂巡り』、④平成 24 年 (2012)『内子町の民間信仰と大師信仰』による。

イ. 黒内坊大師堂

内子町で最も西に位置する大師堂。昭和 40 年 (1965)、国道 56 号改良工事のため、現在地に移築した (③による)。元は明治 37 年 (1904) 頃に建てられていた。間口 2 間、奥行 2 間の木造で、木造の弘法大師像が安置されている。

毎年 8 月 15 日には念仏を唱え、終了後お供え物をいただき、夏病除けとする。また、毎月 20 日にも念仏を唱え、終了後に集会所において小宴を行っている。

ロ. 思案堂

弘法大師が当地に來た時、野宿をしようか久万方面に行こうか、あるいはどこに札所をおいたらよいかと思案した場所であるとの言い伝えがある。内子の入り口にあたり、かつては四国遍路の休み処として賑わった。建物は木造で、昭和 30 年 (1955) に修繕されている。かつてはお堂の近くに「番外さん」と呼ばれる庵があり、高野山から直接ここに出張所が設置されていたとも伝わる。

天保 4 年 (1833) 造の遍路道道標、明治 16 年 (1883) 造、昭和 10 年 (1935) 造の遍路石柱がある。



思案堂

ハ. 福岡大師堂

お堂の創建は定かではないが、江戸初期と推定される (⑥による)。建物は木造銅板葺きで近年改修を行っている。現在も地区の住人が日参まいりの旗を回し、当番はろうそくと線香を持参してお参りしている。毎年 4 月 21 日と 8 月 21 日の縁日には念仏祈禱を行い、おこもりやお接待が行われている。



福岡大師堂

ニ. 西光寺大師堂

昔、光明真言宗の西光寺があった場所とされており、同寺廃寺の後大師堂が建立された。万延元年 (1860) の建て替えに関する記録が残っており、それ以前の建築であることが分かる。また境内には「天保十己亥」(1839 年) と刻まれた手水鉢などが残っている。

現在も 4 月と 8 月の 21 日には信徒が集まっておこもりを行い、信仰と親睦を深めている。昭和 59 年 (1984) 町の有形文化財に指定。



西光寺大師堂



京の森大師堂



四国遍路巡礼

ホ. 京の森（堂山）大師堂

木造で、大正期(1912 - 1926)の建築と伝わる(㉔による)。大師堂の完成と同時に新四国八十八カ所がつくられた。かつて縁日には餅撒きがあり、露店が並び、相撲大会が催されるなど多くの人で賑わった。堂内には台所、トイレ、寝具などが備えられており、現在も巡礼者の宿泊がある。

(2) 四国遍路に関する活動

①四国遍路

四国八十八カ所霊場は、讃岐（香川県）に生まれた弘法大師（空海）が修行を行った地として伝えられる寺々のことで、弘法大師信仰に基づき、大師の足跡を訪ねて88カ所を巡礼することを四国遍路という。四国遍路の起源は平安時代の修行僧といわれ、室町から江戸初めにかけて一般庶民にも広がり、現在に至るまで絶えることなく続いている。また地域の人々がお茶や果物等でお遍路をもてなし応援する「お接待」と呼ばれる風習が今も受け継がれている。

四国遍路は、長い歴史を超えて地域と共存し継承されてきた、四国が世界に誇る生きた文化遺産である。平成27年(2015)には文化庁より日本遺産として認定されている。

内子町内においても、ほぼ毎日歩いて回る「お遍路さん」を見ることができる。時候のよい春や秋には多く、逆に荒天の雨や雪の日でも見かけることもある。現代ではバスなどの団体ツアーで霊場を回る方法もとられている。札所のない内子町においてはこのような団体を見かけることは多くないが、遍路道をたどるバスもあり、白装束の一行を見ることがもある。

遍路道沿いには遍路道を示す道標が立てられており、内子町にも江戸期の年代が刻まれている臼杵地区の道標や、神徳橋の石標などが残る。現在も道しるべとしてお遍路さんを導いている。町内では、次の札所へ向かうルートが3つあるとされており、㉔大瀬地区と小田地区の境の地点、突合から臼杵地区を抜けるルート、㉔小田地区から真弓峠を越えるルート、さらには㉔東端の上川地区を抜けてほうじが峠を越えるルートがある。

また弘法大師を祀った大師堂も遍路道沿いに多く、五十崎地区には黒内坊大師堂、内子の護国地区には福岡大師堂、大瀬地区に向かう途中、五百木地区には西光寺大師堂、さらに進んで小田地区には京の森（堂山）大師堂などが点在し、また内子・甘日市地区には、弘法大師が野宿をするか次の札所へ向かう



お接待として整備された休憩所、シャワー



お遍路さんが泊まれる千人宿記念大師堂

か思案した、と伝わる思案堂などもあり、お遍路さんたちは手を合わせながら巡礼している。中にはお堂やその付近で宿泊する人もいる。お堂の管理は、ほとんどが近隣の住民によって管理されている。近年では巡礼後に大師堂の修理を買って出たお遍路さんもあり、札所のない内子町においても信仰の場となっている。

②お接待

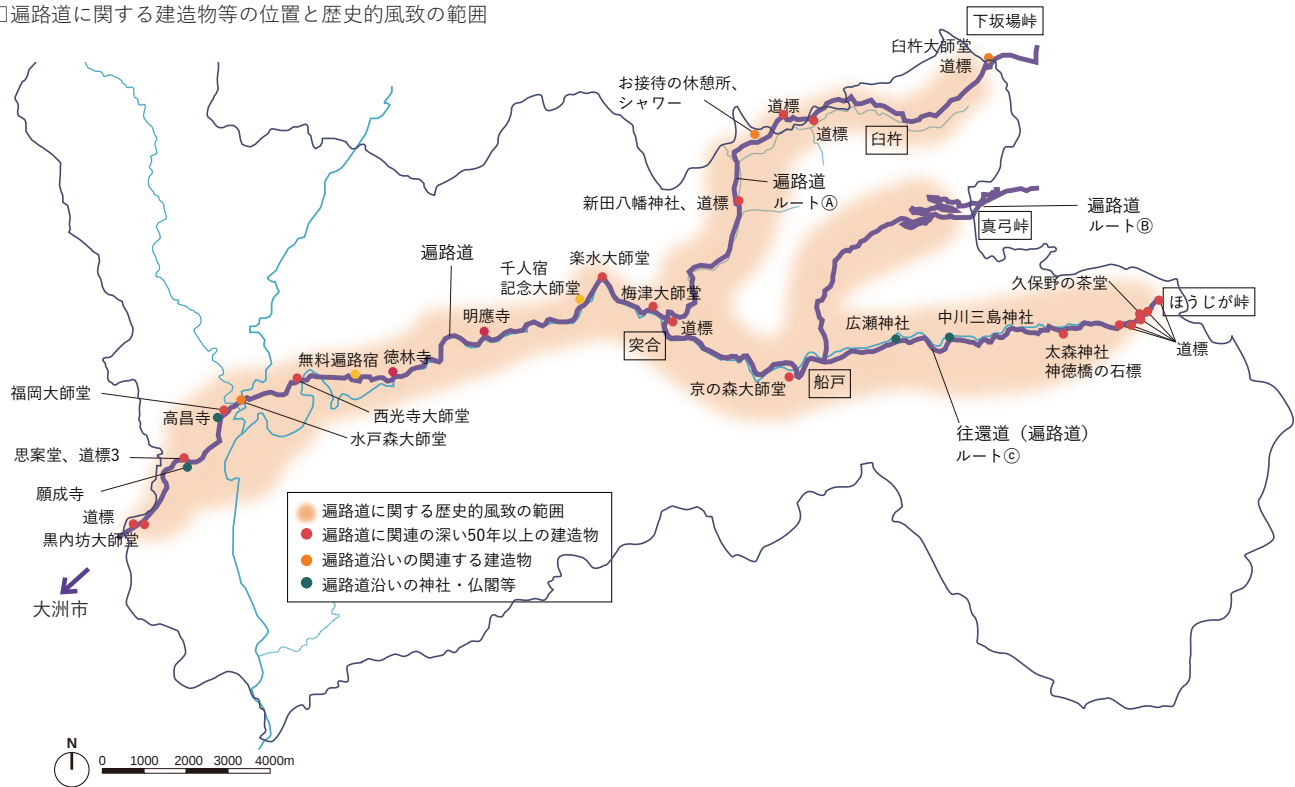
遍路には、故郷に居場所のない不治の病の人や、極貧の民なども多く見られ、彼らを包み込む四国は救済の場所であったとされる。四国には地元の人々が遍路者を弘法大師とみなし（弘法大師とともにある「同行二人」の精神）、大師に供する意味で遍路者に対しての「お接待」が古くから行われてきた。食べ物や飲み物などを無償で積極的に援助したり、あるいは宿泊所を無料で提供したりする「お接待」によって遍路者たちは救われ、かつ地元の人々もまた救われてきた。これは単なる信仰心だけでなく、地域に根付いている人々の温かさ・優しさの表れともいえる。お接待が始まった時期は明確ではないが、江戸初期の澄禅の『四国辺路日記』にお接待を受けたことが書かれており、四国遍路の普及と

ともにお接待の文化も浸透していったと考えられている。

内子町においても、遍路道沿いには無料で使えるお堂が地域の住民により整備され、宿泊も可能である。大瀬川登地区の「千人宿記念大師堂」は、同地区の山本氏が昭和2年(1927)に自宅の六畳間を開放して始めた無料で泊まれる「善根宿^{ぜんこんやど}」で、お遍路さんの宿泊が千人になったことを記念して昭和5年(1930)に建てたお堂。昭和61年(1986)に建て替えたが、親子三代にわたって温かいお接待を続けいている。

また近年ではトイレや湧水を使った簡易シャワーなどを地域の人が整備するなど、地域づくりの一環としてお接待を行っている地区もある。常設ではなくても、道すがら出会ったお遍路さんに食べ物や飲み物を提供する人も多い。道の草刈りなども地域で行っている。また四国全体ではNPOなどによるトイレの調査やマップ、表示物等の整備が行われている。

□遍路道に関する建造物等の位置と歴史的風致の範囲



2 新四国八十八カ所

かつて巡礼の旅に出ることは容易でなく、誰もが巡礼できるように主に明治期、各地に設けられた「新四国八十八カ所」。集落など一定のエリア内に 88 カ所を定めてお堂や石仏を設置し巡礼する。石仏は 1 枚の石に本尊と大師像が同座する珍しい形式である。

現在、各地域に石仏やお堂が残っており、日常的に近隣の住民がお参りをしたり、管理をしたりしている。しかし 88 カ所ほぼ全てが手入れされ、かつ巡礼が行われている地区は限られており、中でも内子・城廻地区や立川地区、御祓地区は巡礼が今も続いている。お接待については個人の気持ちや精神で行われるものであるが、中には日を決めてお料理などをつくり、地域を上げて「お接待」しているところもある。

途絶えたり荒廃したりしている地区において

は、石仏を探したり札所を復活させたりすることを自治会活動として行う動きも見られ、根底に信仰心がありながらも、地域を見直すきっかけという役目も果たしている。

(1) 内子・城廻地区の新四国八十八カ所

①関連する建造物

平成 7 年 (1995)『新編内子町誌』によると、明治 27 年 (1894) に地元有志者が石仏などを設置。出資者の多くが町内の旦那衆であり、当時最盛期を迎えていた製蠟業者の名前も多く見られる。1 番札所の東町大師堂から 88 番札所の火防地蔵堂まで全長約 14 km の巡拝路になっており、願成寺や高昌寺、三嶋神社、思案堂、福岡大師堂などに石仏が置かれ札所となっている。

イ. 1 番札所：東町大師堂

五百木村庄屋であった高橋家より寄進された弘法大師座像を祀る大師堂。寛政11年(1799)『寺社御改帳』に記載があり、この頃には建立されていたものと考えられる。現在のお堂の建築年代は不明だが、平成2年(1990)『内子の神社・仏閣』によると、昭和36年(1961)の改築の記録がある。また明治43年(1910)の銘のある手水鉢が奉納されている。



東町大師堂

ロ. 88 番札所：火防地藏堂

宝暦6年(1756)建立されたと伝わるが定かではない。『六日市永久録』によると宝暦12年(1762)と寛政2年(1790)の間に2度も大火に見舞われており、これ以上火事が起こらないようにと火防地藏尊として祀られたと伝わる。文政8年(1825)の銘のある常夜灯が2基奉納されている。



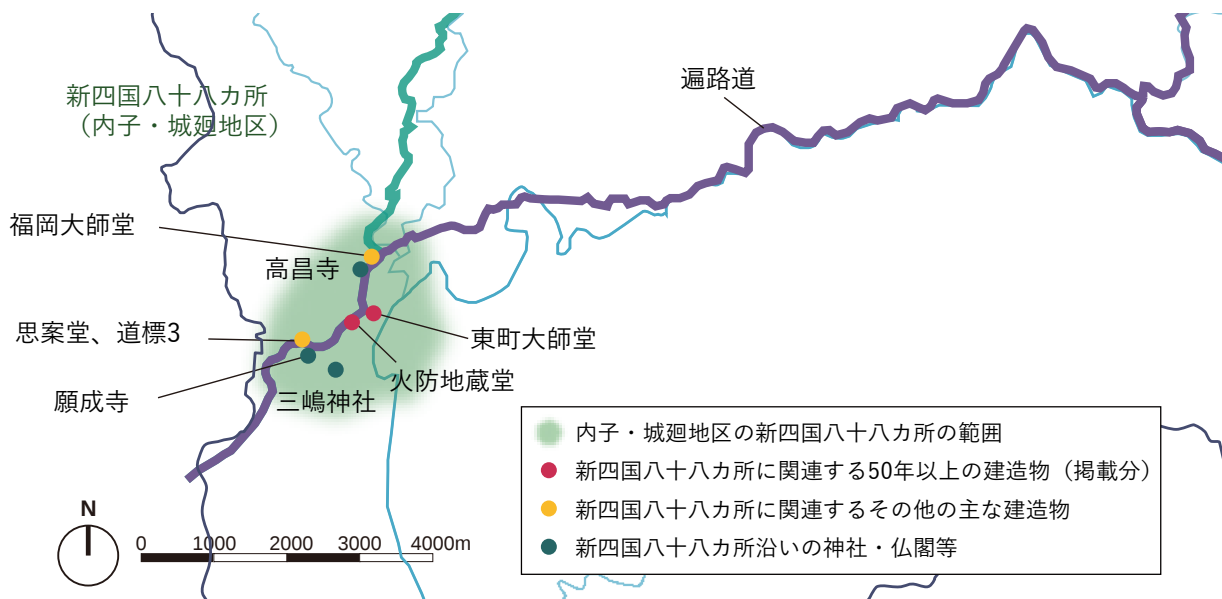
火防地藏堂

②関連する活動

内子・城廻地区の新四国八十八カ所は、現在も普段の巡礼や参拝が個人で行われている。昭和33年(1958)にまとめられた『内子四国八十八カ所巡拝しおり』によると、戦争などでいったん途絶えかけた新四国八十八カ所を再興しようと、各札所近隣の住民たちが清掃などを行い、札所の再整備と併せてこのしおりを発行した。1 番札所の東町大師堂や88 番札所の火防地藏堂をはじめ各札所の清掃や管理は、現在も近所の住民によって行われている。近年ではこの巡礼の文化を後世へつなぐと内子自治センターと内子東自治センターの共催で「遍路道ウォーク」として広く呼びかけ巡礼が行われている。



内子地区の新四国八十八カ所巡礼



(2) 立川地区の新四国八十八カ所

①関連する建造物

立川地区の新四国八十八カ所は、平成2年(1990)『内子の神社・仏閣』によると、大正初めに地区の有志が寄附を募り、立川地区及び長田地区・宿茂地区の一部に開いたのが始まりである。

これは、大藤茂三郎という人物が明治末期に償いのために四国遍路に旅立ち、道中苦難に遭遇するもお大師様の加護を受け、無事結願することができ、その恩に報いるため地域の有志によって開かれたと伝わる。



上 _ 修行大師堂内部
左 _ 大正2年の銘のある手水鉢



茶谷大師堂

イ. 1番札所：修行大師堂

平成2年(1990)『内子の神社・仏閣』によると、大正初期に大藤茂三郎が建立したと伝わる。旧堂は大師堂と礼拝所が別棟に建てられた立派なものだったが、老朽化したので昭和46年(1971)に地区の有志により改築された。大正2年(1913)の銘の入った手水鉢が残る。

ロ. 3, 4番札所：茶谷大師堂

文久年間(1861～1863)に周桑郡香園寺より御神体をお迎えしたと伝わる。平成2



立川新四国八十八カ所巡礼



札所でお接待にミカンや柿をいただく

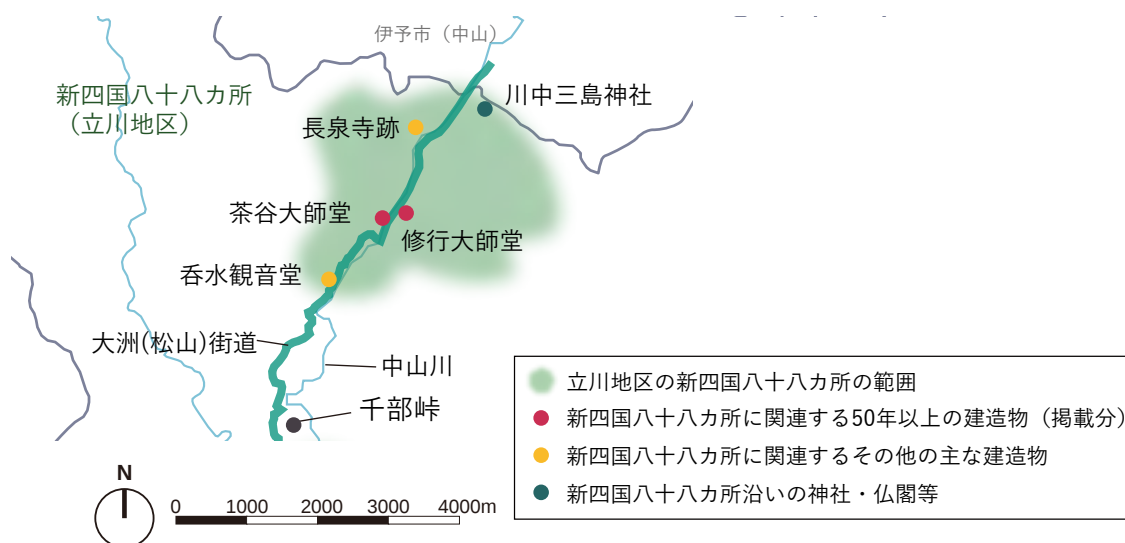
年(1990)『内子の神社・仏閣』によると、創建時のお堂は18㎡ほどあったが、昭和40年(1965)に解体され、同時期にその厨子に銅板葺の屋根を付けて現在の大師堂(約2㎡)が再建されている。昔は旧街道に面しており、参詣者も多く大師堂横にあったエノキの下には饅頭屋があり賑わっていた。

②関連する活動

先述のとおり、立川地区の新四国八十八カ所は大正初めに始まった。その後地域住民が巡礼を続け、昭和16年(1941)頃からは立川老人会が主となって行っている。昭和46年(1971)『内子町誌』(編さん時点は昭和40年度)

にも当地区での新四国八十八カ所の記載がある。

1番札所の修行大師堂から始まり、3、4番札所の茶谷大師堂、25番札所の香水観音堂などを経て、88番札所の長泉寺跡までの巡拝路は山にまたがる。非常に広範であるため難関である。現在は2年に1回、2日に分けて行っている。巡礼を行う日には地元の人による飲み物や果物、菓子などのお接待が両日とも10カ所ほどある。1番札所の修行大師堂では、4月にもおこもり、お接待を行い、また3、4番札所の茶谷大師堂では、8月のお盆過ぎの土日におこもりを行うなど、地域住民の集う場にもなっている。



(3) 御祓地区の新四国八十八カ所

成立年代は不明だが、平成 10 年 (1998) 『五十崎町誌』によると、只海村と北表村の庄屋同士の話し合いによって始まったと伝わる。供養塔には明治 14 年 (1881) と刻印されているため、明治初期に完成したものと考えられる。

①関連する建造物

イ. 1 番札所：常久寺^{じょうきゅうじ}

平成 10 年 (1998) 『改訂五十崎町誌』によると、天文 3 年 (1534) 開山。元は川上にあったが、天保 5 年 (1834) 庄屋・富永家の住居に移転。昭和 42 年 (1967) に位牌堂、本堂の改築を行った。平成 5 年 (1993)、檀家一同の念願であった鐘楼を新築している。



常久寺

ロ. 88 番札所：海蔵寺^{かいぞうじ}

平成 10 年 (1998) 『五十崎町誌』によると、年代は定かではないものの、寛永 2 年 (1625) 頃が起源であると考えられている。本堂は寛延 3 年 (1750)、山号を改めた際に新築された。当初は草葺屋根の宝玉造だったが、大正 6 年 (1917) 瓦葺に改修。昭和 40 年 (1965) に位牌堂を兼ねた本堂に改築。内山地区唯一の真言密寺である。



海蔵寺

②関連する活動

1 番札所の常久寺から 88 番札所の海蔵寺までの全長 10 km の巡礼路になっている。かつては春・秋 (4 月 21 日と 8 月 21 日) の 2 回巡礼の日があったが、現在は地区主催で春のみ巡礼している。

御祓地区は特にお接待が盛んで、常久寺や海蔵寺、川上大師堂や新田地蔵堂など 6 カ所で施される。明治 44 年 (1911) の『大師様施』という接待記録帳が残っており、1 カ所のお接待で使った米が 3 斗 (1 斗 = 10 升) という



御祓地区の新四国八十八カ所巡礼

記録がある。現在お接待で振る舞われるのはお寿司や赤飯、そうめん、季節のおかずなど。新田の地蔵堂では、秋の祭日にも小豆ご飯を炊いて地域の人がお堂に集まり、おこもりを行っている。

平成 10 年 (1998) 『改訂五十崎町誌』によ

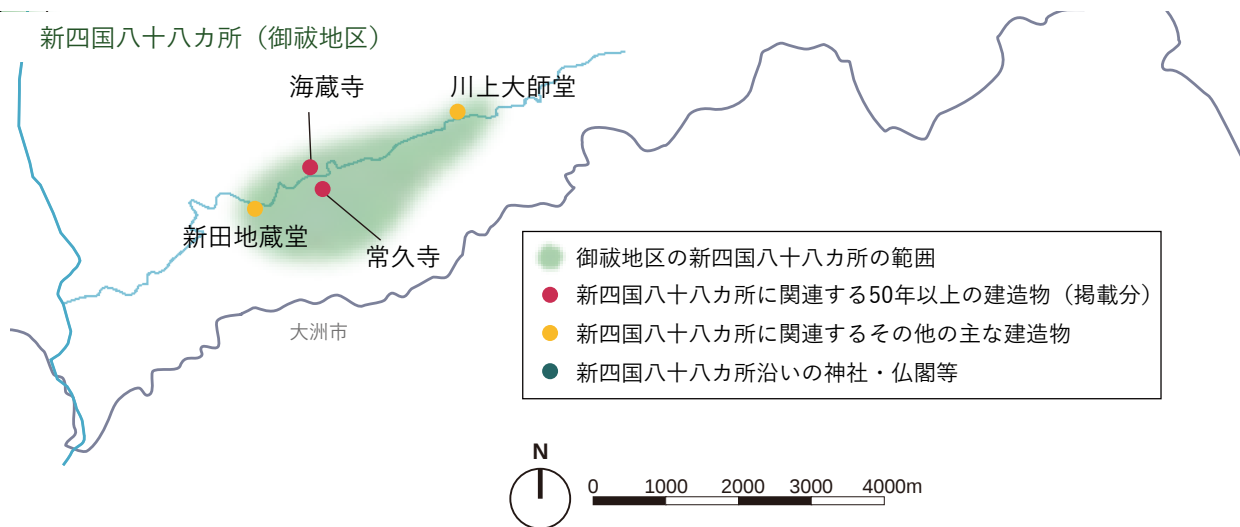
ると、昭和 30 年 (1955) 頃まではこの日に「みそぎお市・お祭り」を併せて行い賑わっていた。現在もお接待に併せてお念仏を行うところもあり、お接待は、地域の人が集う場としてもてなすという一面もある。



川上大師堂でのお接待



新田地蔵堂でのお接待



□まとめ

山間部に位置する内子町においては、急峻な山道を上がるといくつも集落が現れる。その集落ごとに文化や風習があり発達し、また寂れていった。

このような歴史の中で、「道」は時代時代において重要な役割を果たしてきた。集落をつなぎ、物を運び、人の交流を生み、新たな文化を創り、現在の内子町を形作ってきた。遍路道もその一つであり、信仰心によることだけでなく、内外の交流や刺激を求めた結果が「お接待」につながっているともいわれている。

現代の高度・高速な情報社会において、ヒューマンスケールである歴史的な「道」を見つめ直すことは、これからのまちを考えるときに欠かせない歴史的風致であるといえる。

